

大聖寺藩九谷村からギャラリー萩へ 下口 豊子

大聖寺藩九谷村（現石川県加賀市山中温泉九谷町）、霊峰白山に抱かれた人里離れた雪深き山里でした。

冬の豪雪は世界をモノクロームに染め上げ、ぬくもりと色彩を人々から奪い取ります。私の夫が生まれ育った故郷です。

その厳しい風土の中で九谷焼は誕生しました。

今なお色あせることなく、人々を魅了し続ける古九谷の名品群。意匠構図はきわだち、線描は力強く、色彩は大胆。古九谷の作風は様々であり、陶工たちは他人の物真似はせず、自らのオリジナリティを追求することに誇りを持っていたのでしょう。



古九谷の美

「青手桜花散文平鉢」に非常に顕著なんだけども、これはもう大自然と直接向き合っていた、つまり自然の本質と人間と向き合ったときに初めて生まれてくる美意識だと思えます。たとえば、いろいろな様式美の伝統があって、そこから勉強してとか、中国の絵画の伝統から学んでとか、そういう間接的なものじゃなくて、描き手が生に接している大自然、その本質をその人の天性で掴み取って描いたとしか思えない。」

高田宏「対談～『雪 古九谷』と私～より」

(作家・石川県九谷焼美術館館長)



青手桜花散文平鉢 古九谷
(石川県立美術館『九谷名品図録』より)

ギャラリー萩 これまでとこれから



夫は古九谷を核にしたまちづくりをと20年ほど前から『古九谷研究会』を立ち上げ、有志と共に美術館建設運動に携わっていました。

そんな縁の中で私はたくさんの陶芸家と知り合い、いつの間にかギャラリーを開くことになっていたのです。



それから15年が経ちました。ギャラリーで開かれる企画展は作家を主役にした舞台です。その舞台を演出するのが私の役目でしょうか。

その時々さまざまなドラマが展開されました。感動の日々でした。

そうしていつの間にか、九谷焼をはじめ加賀の優れた伝統工芸に携わる若い作家たちの未来を拓く手伝いをしたいと、強く思うようになりました。数年前から東京やニューヨークでの企画展を進めています。

日本の小さな町から世界へ・・・と古九谷がそうだったように、優れた工芸品は世界に認められるものだと思えます。

昨年、今までの歩みをまとめながら、札幌に住む長男がホームページを作ってくれました。ブログも時たま更新しています。どうぞ覗いてください。



ギャラリー 萩

住所：石川県加賀市大聖寺下屋敷町ホー8

電話：0761-73-2714

Web：gallery-hagi.info